



稲びかり太平洋のど真ん中
鷹を待つ浮燈台の昏れそむる
月の兎ゆるやかに草なびきをり
荒鹽を夜通し煮るや寝待月
空翔る鳥の迅さよ雪近し
東京に狸多しや流れ星
象潟に大地の力十三夜
新生姜厨に入る山の風
炎帝やヤマトホテルの御立ち台
噴水をいくたび見しか被爆後
野に立てばわれも野守や鹿のこゑ
生れ立ての目高に闘志ありにけり
雨六日葡萄腐しといふべかり
月白やチェロ寝かさるる楽屋口
この世でもあの世でもなし芒原

*

堤 保徳
眞榮城いさを
川村五子
有手 勉
窪田英治
小林春代
清水逍径
水野二三夫
金子圭子
矢島栄子
古畑恒雄
阿部萌子
塩原英子
水谷亮一
渡辺秀雄

火の島の銀漢浴びるわが裸身
昭和とは踏ん張る父母と芋粥と
アトリエは世界の真中秋の声
銀漢やクロコダイルの肉食らふ
鳥風の漂砂の岸を過ぎゆけり
秋燕や毀つ厠に紅埋め
小鳥来るなんでと訊く童
鳥海山に真向きて捧ぐ今年酒
がれ場行くかりそめの世に鳴き兎
鷹渡る戦闘機見る心地なり
十月や家中の水新しき
菊畑埋れさうなる吾が青春
十代の恋の行方や十三夜
憎らしく嗚呼憎らしく小鳥来る
薔薇の木に林檎実ると信じし日

田中優子
高橋洋子
小林さなえ
吉澤 清
二階堂なつみ
小口和子
阿部郁恵
高橋龍治
鎌田文子
豊山れい子
荒川睦子
宮川志津子
谷口俊子
島形英美子
小口洋子

岳俳句・拓くことば 十二月 ④48

宮坂 静生

旺盛な好奇心を持つ。いつか俳句に生きるものだ。

太平洋のど真ん中とは好奇心のかたまり

稲ばかり太平洋のど真ん中 堤 保徳

好奇心旺盛な句だ。「太平洋のど真ん中」がどこなのか。作者が居る処がそうに違いない。そこに稲光を配す。船上であろうか。あるいは島住みであろうか。稲光で一帯が一瞬平らに照らし出される。多分、このとき作者はわが人生の最高のときを意識したのであろう。大海原にわれ一人。船乗り体験をもつ大きな感慨である。若いときの回想句とも読める。

鷹を待つ浮燈台の昏れそむる 眞榮城いさを

宮古島在住の作者だけに、毎年決って「新北風」に乗って本土から渡り来る鷹を待つ。十月九日、寒露の頃だ。浮燈台が作者の気持と通じ合う。あたかも鷹を待っているようだ。思いがしきりならば、風景も躍動して見える。今日も待ちながら一日が昏れる。やさしい島人の思いが伝わる。

月の兎ゆるやかに草なびきをり 川村 五子

月の兎と草原の草との照応を愉しんでいる。名月の連想で

あるが、ことばが伸びやかで広々とした空間が虚実こもごもの間に幻視される。こんな処に佇ったならば永遠の時間を感じるのではないか。作者の求める美意識の世界が見える。

荒鹽を夜通し煮るや寝待月 有手 勉

能登塩田の景か。「荒鹽」と旧字を用いたのは海水から取り出す原始の塩を指したのか。凝ったいい方に作者の目指すものがあるのか。陰暦葉月十九日の夜、遅い月の出を寝て待つ。そんなときの製塩だけに、月信仰を力にしている漁村の素朴な力つよい暮しを感じる。一つの地貌探索の途である。

空翔る鳥の迅さよ雪近し 窪田 英治

雪が近い頃の自然のささやかな変化を空を飛ぶ鳥が迅速になった点に着目した。手応えある発見である。今年は思いがけず、長野県も東京も十一月下旬に雪に襲われた。五十四年ぶりという。天変地異がさらに新たな展開を予測させるようだ。自然界も宇宙的な規模で変わりつゝある。こんなときほど、生の自然をしっかり見つめる眼力をもちたい。

東京に狸多しや流れ星 小林 春代

狸は獣の狸。人間世界の狸も多い。なぜ流れ星なのか。そ

こに注目した。秋の天空を仰ぎ流星に氣をとられていた。その空白の時間に、はっと気付くと狸の跳梁に出会った。夜の住宅街か公園か。残飯など食物があれば、穴熊の類が殖える。都市は意外に野性化し、荒廃している。高層ビルディングが建っただけが都市の特徴ではない。反面、隙が多く、人は暮しが画的になり、心がゆきとどかない。しぜん狸も棲みつく。作者の視野には当然、人界も入っている。個性際立つ作者。

象潟に大地の力十三夜 清水 道徑

みちのくの象潟は芭蕉が俳諧のメッカに立ち上げた処。さすがに天然の地力がゆたかな地。文化元年（一八〇四）の地震で八十八潟、九十九島の景観が変わり、隆起した丘が多い。

今月の秀句

炎帝やヤマトホテルの御立ち台 金子 圭子

ヤマトホテルは戦前満鉄（南満州鉄道）が経営したホテル。こゝは大連ヤマトホテル（大正三年開業）か。ルネサンス様式の四階建て。一一五室を備えた満州を代表するホテル。その御立ち台は莊嚴を極めたホテルの顔。真夏の炎帝を配し、まぼろしの国の皇帝溥儀を思わせる。作者は演劇人なので、そんな芝居をやったものか。戦後の禁忌を破ったふしぎな作。

そこにかえて「大地の力」を感じたものか。十三夜月を出したところに月の引力を思い、俳人らしい余裕があるう。

新生姜厨に入る山の風 水野二三夫

住居が山の麓か。厨に山の風が入るといふ贅沢さ。そこに穫れ立ての生姜の清新さを配し、素質がいい一句になった。巧さよりも日常の暮しの素地に氣付いた点が読み手に安心感を与える。このような句を詠み重ねて、太々した俳人になってほしい。期待できる人だ。

噴水をいくたび見しか被爆後 矢島 栄子

広島が長崎か、原爆の地を詠ったもの。原爆とはかわりない平和な噴水の上昇を原爆の地でいくたびも見た。しかし、噴水は上っても、原爆はなくならない。平和な原水爆禁止の平和宣言は毎年行なわれても、原水爆そのものはいっとうに絶滅しない。粘りづよく禁止を叫びつづける以外にない。長い俳句歴につぶされないうで続けているベテラン作者。

野に立てばわれも野守や鹿のこゑ 古畑 恒雄

奈良詠か。洗練された一語一語に思いがこめられている。万葉集の昔の野守ではないが、鄙の素朴さを失わないところが洗練されている証拠。朗々とした句調が快い。俳句万葉調とでもいいたい。朗詠したいような音声が生かされている。

生れ立ての目高に闘志ありにけり 阿部 萌子

拓くことば ②③ 自句寸言(7)「吾亦紅」

吾亦紅霧の奥にて陽が育つ 昭和36年

「龍膽」(第九十五号・昭和三十六年十一月号) 特別作品「信濃追分」二十八句中に出る。「龍膽作品読後」(第九十六号)で相馬遷子が「垣幾列すすき幾列秋風に」「花蕎麦の丈より低く老婆生く」「豆腐屋の笛の中まで夕焼す」「夕焼け初め豆腐屋息を溜めて吹く」などを取り上げ特に推奨してくださった。最後に「氏の素質と熱心さは将来必ず大をなすだろうと、大いに期待するものである」とあった。二十四歳の日に遷子に褒められたことがその後の私に励みになった。佐久の野沢へ遷子と遠縁にあたる同僚の歴史家伴野敬一に連れられ会いに行ったのもこの直後であった。掲句は大岡信に「垂れこめた朝霧の「奥」で太陽が育ちつつあるという感じ方には、内にこもった若々しい力があって句に膨らみをもたらししている」(『第七折々のうた』)と推奨されたこともうれしく記憶している。以後軽井沢隣りの信濃追分はわが作句場になった。句集『青胡桃』所収。

寒鯉の水の筋金呑みしごと 昭和37年

「龍膽」(第九十六号・昭和三十七年七月号) 特別作品「小諸」二十句中に出る。掲句が初期のわが代表句のようになり『日本名句集成』(学燈社・一九九一年十一月刊)に出て、「水の筋金」とは、寒中の水が、あたかも鯉の体内を環流するごとく、その動きに筋張った堅さの見えることがある(略)「水の」というところにわずかに自在さが留保されている」(倉橋羊村)と鑑賞された。以後引用されることが多い句である。佐久の地は鯉の産地。「眼なき烏賊に信濃の雪の降りかかり」も同時の作。海がない山国は移入された烏賊の眼が抜かれ不気味で哀れ。句集『青胡桃』所収。

子を生し子を生し海の碧さを蚊帳失ふ 昭和37年

「龍膽」(第九十八号・昭和三十七年十一月号) 特別作品「月の教師」十五句中に出る。もとより想像句。「子を生し子を生して棲まふに赤いゆすらうめ」(中塚一碧楼)の句から「子を生し子を生し」を援用したもので、どこまで許されるのか実験作品のつもり。一碧楼の明るい肯定作に対し、生活臭を滲ませひねりを入れたもの。蚊帳に纏わる母親の子育てを思った。句集『青胡桃』所収。

目高にも闘志あり。小さな目高だからこそ闘志ありか。着眼がすぐれている。句が初々しい。これは大事なこと。

雨六日葡萄腐しといふべかり 塩原 英子

土方(差別語にも力あり)に雨の三日ではないが、ぶどう栽培農家にとって、葡萄収穫期に雨が一週間も続けばぶどうは全滅。「葡萄腐し」と新季語を作るくらいでは怒りがおさまらない。生きるに迫力ある作者。体当りの句作よし。

月白やチェロ寝かさるる楽屋口 水谷 亮一

演奏者の楽屋口。月の出の頃には楽器が揃う。チェロも生きもの。演奏前のひと休み。知的でありながらやさしい句。

この世でもあの世でもなし芒原 渡辺 秀雄

晩秋に芒の白穂が風になびく草原は、別世界。宮沢賢治のいう第四次元の世か。宇宙的な光景だ。いくたびも詠われているが、齢を重ねて、幻視力を我々は身につけていく。雪嶺集、前山集から次の句も書き留めた。

菱の実の遠き戦を射るかたち	矢島 恵
満月を宇宙の生みし卵とも	唐澤南海子
逝くものへ遍し二十六夜月	原田 宏子
鷹渡る身に磁気しかと携へつ	原 あや
夕闇や歩き出しさう群稲棒	佐藤 浩子
秋霖や傘させば貌失へり	鎌田 文子

昭和とは踏ん張り生きた時代であった

昭和とは踏ん張る父母と芋粥と 高橋 洋子

平成も二十八年と四半世紀が過ぎ、前の時代昭和が遠くなる。間もなく平成生まれが三十歳となれば、昭和は父母の時代といえよう。戦前・戦中・戦後、激動の時代であった。「踏ん張」って生きた。浪風荒く、立つにも力が必要だった。食べるものは芋粥。その父母の苦勞を熟知している作者にとり、平成の、ペカペカしたスマホに熱中する、すべて効率のみを重視する時代風潮へなにかぶつきたい思いがたまる。掲句は自分にいゝきかせ、回想し納得している作か。平成生まれにすんなり受け入れられるように詠んでいない。明快な主張がある。そこがよかったのではないか。巻頭になるだけの力がある作者だ。

アトリエは世界の真中秋の声 小林さなえ

画家にとり自分の立つ処が世界の真中。「秋の声」がいい。天然自然のインスピレーションである。秋は天の声がとどくときか。遠くのささやきを聞きとめることで世界の真中に立つことができる。しっかりした手応えある一句だ。

銀漢やクロコダイルの肉食らふ 吉澤 清

クロコダイルとはワニ。ワニの種類は現在十数種とか。大陸か南洋の島での食体験か。銀漢を仰ぎながらと、背景があ

鳥風の漂砂の岸を過ぎゆけり
二階堂なつみ

秋しゅう燕えんや毀こぼつ廁かわやに紅べに埋うずめ小口和子

小鳥来るなんでと訊く童
阿部 郁恵

菊畑埋れさうなる吾が青春
宮川志津子

十代じゅうだいの恋こいの行方ゆくえや十三じゅうさん夜や
谷口 俊子

火の島の銀漢浴びるわが裸身 田中優子

庄内平野詠。大らかな作で、一読、心洗われる。ゆたかな

がれ場ばゆ行くかりそめの世よに鳴き兎なうさぎ

鎌田 文子

鷹渡る戦闘機見る心地なり
豊山れい子

十月や家中の水新しき
荒川睦子

憎らしく嗚呼憎らしく小鳥来る 島形英美子

薔薇の木に林檎実ると信じし日 小口 洋子

筆ひちりき策きに
闇やみの
深ふかまる
秋あきの
宮みや
福島
米雄